

方長老上京日史・飲冰行記

近世日朝交流史料叢書 II

◆読み下し・和訳・註釈◆米谷均・金文京・田代和生

◆読み下し・和訳・註釈◆米谷均・金文京・田代和生

▼編著 ▲田代和生
慶應義塾大学名誉教授

ゆまに書房



2021年7月刊行予定

A5判並製／カバー装 定価：本体8,500円+税
ISBN978-4-8433-5903-7 C3321

朝鮮侵略後、日本人が朝鮮の都まで行くことを許された、唯一無二の記録。
近世日朝関係を探るための第一級史料。

本書の特色と内容

日本の朝鮮侵略（文禄・慶長の役／壬辰・丁酉倭乱）後の寛永6（1629）年、「日本国王使」として初めて対馬から朝鮮の都漢城へ派遣された日本側使節及び朝鮮側応接官の記録。江戸幕府の公許を得て、他国へ派遣された数少ない「日本国王使」の記録であるばかりか、日本人が朝鮮侵略後に都まで行くことを許された唯一無二の記録として注目される。筆者は日本側の正使規伯玄方と、朝鮮側の応接官鄭弘渙で、これに日本側副使杉村采女の家人による「御上京之時毎日記」（『近世日朝交流史料叢書III』収録予定）を併せ読むことで、この使節の全体像を双方向から探ることができる画期的な史料集となっている。

●底本

『方長老上京日史』（ほうちょうろうじょうきょうこうにし） 原本は紛失しているため、阿比留恒久編『善隣通書』巻十九（東京国立博物館所蔵）所取の写本を底本とした。

『飲冰行記』（いんぴょうこうき） 著者鄭弘渙の子孫にあたる鄭求善氏（韓国歌辞文学館名譽館長）が所蔵する原本を底本とした。同書は、2004年に韓国歌辞文学館から影印ならびに翻刻版が刊行されたが、今回あらためて日本における出版の御許可を賜わり、影印版のため韓国光州女子大学校教授の鄭成一氏による鮮明な撮影画像を得ることができた。

●「解説編」と「影印編」に分けて収録

「解説編」は、読み下し文と訳註からなる。主として漢文、時に漢詩からなる原文に、句読点を付して読み下し、さらに和訳と詳細な註を付した。紀行文のため、1日ごとに掲載する。

●編者による詳細な解説と索引

編者による、著者と史料についての時代背景までさかのぼった詳細な解説、及び史料活用の便を図る索引を付した。

●『御上京之時毎日記』（近世日朝交流史料叢書 III）について

寛永6（仁祖7/1629）年の「日本国王使」の日本側の記録としては、『方長老上京日史』以外にも副使杉村采女の家人の記録『御上京之時毎日記』が現存している。本史料は『近世日朝交流史料叢書 III』に収録し、上記『叢書II』に続き、2022年に刊行する予定である。

朝鮮の都漢城へ派遣された日本側使節及び朝鮮側応接官の記録

『飲冰行記』は、玄方一行に対応した鄭弘渙が、漢城（ソウル）を出發してから、釜山倭館における厳しい交渉を経て漢城に戻るまでを記した日記風記録であり、後年まとめられたものである。日本側の知り得ない朝鮮側の動きや意識を詳細に伝える貴重な記録である。

著者の鄭弘渙（ていこうめい 1582~1650）は、朝鮮時代中期の官僚政治家。号は崎庵。宣祖（在位1568~1608）政権の重鎮である鄭澈の四男。科挙に合格して両班官僚となったが、父が党争に敗れたため政界官界から排除された。1623年のクーデター（仁祖反正）後、仁祖（在位1623~49）政権に登用されて要職を歴任した。鄭弘渙は漢城に帰着した後は対日交渉に携わることはなかった。要職を歴任して仁祖政権を支え、引退の後、故郷全羅道潭陽の地で没した。

本文見本 約62%に縮小

飲冰行記（解説編）

復するも亦た陵侮の言多く、其の辱を受くること頗る多し。且つ玄方、前日、國書を奉じて出去するに、只だ海上に待たしむるのみなり。此れも亦た恥羞の端也。此の數款を以て義成を傾軋し、顯かに易置の勢い有り。今は他に情願なし。只だ國中に傳命する一事もて日本に聞こえ。傳播して見聞すれば、則ち其の光彩たるや知るべし。此れ是れ方に玄方密言の大意なり。而して譯官の彼の中情の形を知る者は、揣度するに其の實は然也。薄暮にして乃ち罷む。方に其の接待の時、玄方と智廣に各従うところの倭五六十輩有り。後ろに羅列し、又た庭中と牆外に列坐する者各十數人なり。俱に大小二劍を帶び、跣足赤脚すること、將に敵を待つ者然たるが如し。獨傳語の時のみ劍を解き以て入る。以て敬をなすと云う。玄方の坐後に四五僧倭有り。剃髪露頂す。而して坐に又た一少僧有り。頭に黒布巾を戴く。密邇して側に坐す。號して侍奉と稱すと云う。釜山軍官安祥狀を持ちて差遣し、晝夜なく馳進し以て稟す。

【訳註】

（四月）十二日。雨。朝、訳官宿義吉²に書状を持って倭館に入らせ、大よそ、「ただちに乗船したのは、客と主人が対応する正しい礼儀の道から外れている」と伝える。訳舌³が戻ってきて「両使の怒気が甚だしく」という話はできなかつた。すでに荷物を積み込み、すぐに乗船して港から出でてしまい、風待ちしながら（朝鮮の）朝廷の回答を待つていると報告してきた。そこで訳官に何度も説得させた。また菜釜⁴主人⁵を逐次、倭館に派遣して極力、説得させようとしたが、玄方⁶等は会うことを承知しなかつた。何度

本文見本 約62%に縮小

方長老上京日史（解説編）

（三月）十二日。上京の訴書文に尽くすと雖も、言語相い争い難じて、未だ敢えて果たさず。故に予と杉村¹相い議して謀計²を出す。舟に乗り浦を発たんと欲す。此の時、東萊³釜山の両伯⁴蒼黃として館に臨む。宣慰使鄭弘渙⁵翁も亦た相い遂いて來たる。此に於いて卒かに賓館を開き、茶礼を設く。備さに往復して両情を通わすこと述べ、亦た復び転啓することを約す。而して後に宣慰使、醜興⁶に因り、予の杯盤上の造花を見て玩てて戯れに曰く、師は此の花を見ると、花は眞なりと。予曰く、盤上の花は眞か、庭上の花は眞かと。予曰く、盤花は是れ眞なりと。宣慰使曰く、其の理は如何と。古教に謂わざるか、一切の有為法は夢幻泡影の如しと。又た曰く、凡そ所有の相は、皆みな是れ虚妄。畢竟⁷看來するに、幻中の幻を以て還つて眞と為す。向來幻言の間、據べて眞なる者、会せるかと。宣慰使即ちに書して曰く、酒席の丈老⁸、戯れに幻の一字を以て詰頭⁹と為す。因りて又た小偈¹⁰を演成す。實に是れ幻中の幻堪えて絶倒すべし。万像は皆な幻と知るも、一法果たして誰れが眞なる。試しに看よ津水の会、元とはれ異郷の人と。予乃ち答書して曰く、宴席の醉話、即ちに二十字の華偈¹¹を為して之れを賜い、返すに幻中の眞を以て。歎¹²打¹³に堪えず。漫るに尊韻¹⁴を贅して曰く、至道に形象無し。法身は幻と眞に依れり。顔々相い対す処、便ち是れ本来人¹⁵と。

の頃にまたやつて来たので、会つてへちゃくちやと言ひ争つた。

- （1） 訳官（倭學訳官）恐らく宣慰使付き差備訳官の李彥瑞（りやげんざい）（三月七日註³）と朴彦瓈（ぱくげんざい）（三月七日註⁴）か。
（2） 宣慰使 鄭弘渙（ていこうめい）（三月五日註⁵）。

38

国王使と偽り、漢城まで上京を果たそうとする日本側正使規伯玄方の記録『方長老上京日史』の3月12日の条。

『方長老上京日史』は、寛永6（1629）年の使行記録で、江戸時代最初で最後となった漢城（ソウル）への入京を成功させた貴重な記録である。後年まとめられた記録ではあるが、上京に至るまでの経緯、旅中朝鮮側官入らと交換した53首の漢詩、当時の漢城の様子や王宮参拝のことなどが収録されている。

著者の規伯玄方（きはくげんぼう 1588~1661）は、江戸時代初期の臨濟宗の僧侶。自雲・晦溪・劫外とも号した。師の景徹玄蘇の後継者として対馬島の対朝鮮外交を担当し、元和7（1621）年と寛永6（1629）年の二回、「日本国王使」正使として朝鮮へ赴いた。玄方は後年「柳川一件」において国書改竄の責任を問われ、寛永12（1635）年盛岡へ配流される。万治元（1658）年赦免されて南禅寺へ移り、寛文元（1661）年大坂九昌院にて74歳で示寂した。

近世日朝交流史料叢書

◆好評発売中◆

I 『通訳酬酢』 小田幾五郎、近世後期

定価：本体5,800円+税

ISBN978-4-8433-5167-3 C3321

◆次回配本◆ 2022年刊行予定・価格未定

III 『御上京之時毎日記』 杉村采女家人、寛永6（1629）年

◆以下続刊◆ 價格・刊行順未定

『柳川調興公事記録』宗義成、寛永期（1630年代）

『斛一件覚書』雨森芳洲ほか編、宝永5（1707）年

『詞稽古之者仕立記録』雨森芳洲著、元文元（1736）年

『贊言試集』筆者不明、近世後期

『韓語稽古規則』朝鮮語通詞編、明治前期

『朝鮮行日誌』筆者不明、明治5（1872）年



ゆまに書房 ☎101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6 TEL.03(5296)0491 FAX.03(5296)0493

<http://www.yumani.co.jp/>

| | |
|---|----------------------------|
| ゆまに書房 Tel.03(5296)0491/Fax.03(5296)0493 年 月 日 | 取扱店 |
| 方長老上京日史・飲冰行記 近世日朝交流史料叢書 II 定価：本体8,500円+税 ISBN978-4-8433-5903-7 C3321 | 部 |
| お名前 | ※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。 |
| ご住所 | TEL () |